

Japanese Working Class Artist ~ RYO KANZYU



短い物語P&D

RUN



ORIGINAL
SINGLE

¥ 0

「RUN」 (1 / 2)

男は赤い車で走っていた。

愛車と呼べるほど愛でたヤツじゃないけれど、気に入ってはいた。

「この車との別れが近いから、夢に出て来たんだろう」



街は目を覚ましていない時間。

まだ一台も追い越して行かない。

すれ違う相手もない。

けれど、後ろには誰かがいた。

男はそいつに追いつかたくなかった。

幸い信号は男の味方となり、ずっと先まで青。

そんな偶然が続いた。

見通しも良い二車線だから、その気になって走りたくなる景色。

男はルールを破ることなく、臆病なくらい慎重に走った。

それでもスピードに目が眩み、判断力が闇に吸い取られそうになった。

迫る車は怖いくらい無口だ。

ヘッドライトは、まるで照準を合わせるためのレーザー。

バックミラーを見ていない男は背中を感じていた。

男は知り尽くした道を瞬時に選んで滑り込み、寂しい方へ向かう。

いつしか背の低い街並へ。

ハイビームのヘッドライトもそのまま。

男は少しずつ前に傾き、瞬きの回数も減っていた。 ～続く

~~~~~  
【画】

□タイトル(Title) : 『RUN～SCENE1』

□作家名(Artist) : 環樹涼(RYO KANZYU)

□制作年 : 2009

□技法 : ボールペン

□作品サイズ(縦×横) : B4サイズ相当の画用紙を使用。

縦19cm × 横14cmの枠内に描画。

□販売価格 : 非売品

男は逃げていた。  
とにかく走り続けるしかなかった。  
ガソリンのメーターを気にしながら辺境の街を彷徨う。  
どの道も見覚えがあるけれど、狭く勝手が悪い。  
もうすぐ朝日が近いから、東へ向かうことは避けたかった。  
ちらっとだけ見るバックミラーには、白い車。  
今頃になって色を確認した男。  
妄想と迷走が並走し、まだ止まることはなかった。

走り続ける。  
すなわち逃げる。

時々だけど、それがいつからか見るようになった夢。  
目覚めるまで当然続く。  
それまで走る。  
逃げる。  
いつの間にか空には青色が寄せていた。  
まだ続くのかと弱気になった時、男はブレーキを踏んだ。  
少しだけタイヤが焦げる。  
運転席側が朝日を浴び、車は停止した。  
男は汚れたウィンドウを下げた。  
外は、一面の田園風景だった。



世界の果てまで広がっていきそう。  
朝靄の中、遠くの空に白い風船。  
巨樹の枝から解き放たれたように飛んで行く。  
男はもう追手のことなど忘れていた。  
振り返って確かめることもしない。  
そう、もう追いかけては来なかった。

再び走り出すと、すぐに景色は変わった。  
見上げれば高さが違うビル群。  
ブックエンドに支えられた本が集まったような街。  
しばらくあても無く走り続けた後、今度は急ブレーキを踏んだ。  
突然、道路が途絶えたような気がしたからだ。  
車が止まった場所は、どこか高所の先端だった。

断崖のすぐ手前でギリギリ止まったような状態。

目の前には、白い壁。

ようやく男は理解した。

あの壁はカーテン。

ここはリビングにあるテーブルの端っこ。

男は、夜明けを迎えるまでミニカーで走り続けていた。

夢の中の夢を行くように。 ～終わり

~~~~~

【画】

□タイトル(Title) : 『RUN～SCENE2』

□作家名(Artist) : 環樹涼(RYO KANZYU)

□制作年 : 2009

□技法 : ボールペン

□作品サイズ(縦×横) : B4サイズ相当の画用紙を使用。

縦19cm × 横14cmの枠内に描画。

□販売価格 : 非売品